

組織学実習

科目責任者 徳田信子
学年・学期 2学年・1学期

I. 前文

組織学・解剖学・発生学において学んだ知識を本実習において確認していく。実習ではバーチャルスライドを用いて、染色された標本を観察し、その臓器・組織・細胞をマクロからミクロまで連続して理解することが大切である。

II. 担当教員

教授	徳田信子	解剖学
准教授	上田祐司	解剖学
学内准教授	江原鮎香	解剖学
講師	山口剛	解剖学
助教	橘篤導	解剖学
助教	北沢祐介	解剖学
助教	沢登祥史	解剖学
教授	矢澤卓也	病理学
講師	矢澤華子	病理学
助教	石井順	病理学
助教	柏木維人	病理学

III. 一般学習目標

完成したヒトの正常構造が、細胞およびその有機集合体である組織により、いかに構成されているかを実習によって確認する。

IV. 学修の到達目標

- 1) 細胞の基本的構造について観察し、理解する。
- 2) 組織の概念を理解し、構造を観察する。
- 3) 器官（臓器）を構成する組織・細胞を観察し、理解する。

V. 授業計画及び方法 * ()内はアクティブラーニングの番号と種類

(1: 反転授業の要素を含む授業 (知識習得の要素を教室外で済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態。))

2: ディスカッション, デイバート 3: グループワーク 4: 実習, フィールドワーク 5: プレゼンテーション
6: その他)

回数	月	日	曜日	時限	講義テーマ	担当者	アクティブラーニング
	4	26	水	3	オリエンテーション	解剖学 学員	
1		28	金	3	呼吸器①	解剖学 学員	4
2		28	金	4	呼吸器②	解剖学 学員	4
3		28	金	5	呼吸器③	解剖学 学員	4
4		28	金	6	呼吸器④	解剖学 学員	4

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者	アクティブ ラーニング
5	5	2	火	3	循環器①	解 全 剖 学 員	4
6		2	火	4	循環器②	解 全 剖 学 員	4
7		2	火	5	循環器③	解 全 剖 学 員	4
8		2	火	6	循環器④	解 全 剖 学 員	4
9		9	火	3	消化器①（口腔～食道・唾液腺）	解 全 剖 学 員	4
10		9	火	4	消化器②（口腔～食道・唾液腺）	解 全 剖 学 員	4
11		9	火	5	消化器③（口腔～食道・唾液腺）	解 全 剖 学 員	4
12		9	火	6	消化器④（口腔～食道・唾液腺）	解 全 剖 学 員	4
13		12	金	3	消化器①（肝臓・膵臓）	解 全 剖 学 員	4
14		12	金	4	消化器②（肝臓・膵臓）	解 全 剖 学 員	4
15		12	金	5	消化器③（肝臓・膵臓）	解 全 剖 学 員	4
16		12	金	6	消化器④（肝臓・膵臓）	解 全 剖 学 員	4
17		16	火	3	消化器①（胃～肛門）	解剖学・病理学 全 員	4
18		16	火	4	消化器②（胃～肛門）	解剖学・病理学 全 員	4
19		16	火	5	消化器③（胃～肛門）	解剖学・病理学 全 員	4
20		16	火	6	消化器④（胃～肛門）	解剖学・病理学 全 員	4
21		22	月	3	血液・骨髄①	解 全 剖 学 員	4
22		22	月	4	血液・骨髄②	解 全 剖 学 員	4
23		22	月	5	血液・骨髄③	解 全 剖 学 員	4
24		22	月	6	血液・骨髄④	解 全 剖 学 員	4
		29	月	1・2	中間試験	解 全 剖 学 員	
25		30	火	3	内分泌器①	解 全 剖 学 員	4
26		30	火	4	内分泌器②	解 全 剖 学 員	4
27		30	火	5	内分泌器③	解 全 剖 学 員	4
28		30	火	6	内分泌器④	解 全 剖 学 員	4
29	6	5	月	3	泌尿器・男性生殖器①	解 全 剖 学 員	4
30		5	月	4	泌尿器・男性生殖器②	解 全 剖 学 員	4

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者	アクティブ ラーニング
31	6	5	月	5	泌尿器・男性生殖器③	解 全 剖 学 員	4
32		5	月	6	泌尿器・男性生殖器④	解 全 剖 学 員	4
33		13	火	3	女性生殖器①	解 全 剖 学 員	4
34		13	火	4	女性生殖器②	解 全 剖 学 員	4
35		13	火	5	女性生殖器③	解 全 剖 学 員	4
36		13	火	6	女性生殖器④	解 全 剖 学 員	4
37		22	木	3	視聴覚器①	解 全 剖 学 員	4
38		22	木	4	視聴覚器②	解 全 剖 学 員	4
39		22	木	5	視聴覚器③	解 全 剖 学 員	4
40		22	木	6	視聴覚器④	解 全 剖 学 員	4

VI. 評価基準（成績評価の方法・基準）

定期試験（85%）、課題提出など（15%）により、総合的に評価する。

VII. 参考図書

教科書：標準組織学 各論 藤田・藤田（著）医学書院

バーチャルスライド 組織学 駒崎著 羊土社

参考書：カラーアトラス 機能組織学 カー著 河田・小路（監訳）医歯薬出版

Ross 組織学 内山（監訳）南江堂

人体の正常構造と機能 坂井・河原（編集）日本医事新報社

VIII. 質問への対応方法

基本的に毎回の講義終了時に疑問は解決すること。

講義終了の休み時間、放課後、教室にて随時受け付ける。

IX. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	○
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	○
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	

X. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

実習課題は、実習中に巡回する教員が随時質問に応じる。

試験内容については、希望があれば講評・解説する。

XI. 求められる事前学習、事後学習およびそれに必要な時間

シラバス別冊に記載。

XII. コアカリ記号・番号

シラバス別冊に記載。